

の1つとしての民宿経営が出現・増加した時期。③戦後約10年の間、戦争で減少した客の復活の時期であり、民宿・スキー場数及び施設増加の時期。④高度経済成長政策下の現在に至るまでの時期で、生活安定、観光ブームに客数も急増、大資本による大々的な観光開発が行われ、受入れ体制充実、大型化と、全村的な観光地としての道を歩む時期。このような時期区分は又、全国的なスキー場発展の時期区分にも当ると言われる。が、白馬村の観光地としての利用拡大には、その立地条件の優位性がバックアップしていると言える。

観光地としての白馬村の発展は農業地域としての白馬村を変えていったことは言うまでもないが、全村的にみると、①農業人口減少と建設・商・サービス業の増加。②農家の兼業率増加（つまり民宿・建設業の職人）と兼業内容の変化。③農業の水稲作への一本化。④農業に対する考え方の軟弱化。等があげられる。

全村的な考察をふまえた上で、白馬村内の地域的な違いを考え、最後に地域区分を試みると、3つの地域に分けることができる。①観光主地域－観光資源としての自然条件に恵まれ、観光地としての利用の起源も古く、又大資本導入により観光開発の行われた細野、および交通の要点となってきた四ツ谷、森上、を中心とする地域。②前述の自然条件、および交通条件に恵まれず、近年の学生村としての民宿経営も行われないうち、山間の農業に力を注ぐ地域－農業主地域。③上述2地域の間として、その位置あるいは自然条件から、計画しだいで今後①へ移行する可能性のある地域。あるいは①を移行しないで現在の中間的性格（むしろ②に近い）を維持すると思われる地域＝中間地域（に近い）を維持すると思われる地域＝中間地域

そこで結論として村の将来を考えてみるに、全村的な、通年の大型観光地化の意向からも、農閑期利用としての観光に出発した経営は今後、多くの地域で、農業を従とする経営に拡大し、観光地としての性格を強めていくとともに、その内容にも変化を加えていくと思うのである。

## 八ヶ岳南麓の地理学的考察 （高冷地蔬菜と酪農を主として）

寺沢 綺佐子

本論文の対象地域は八ヶ岳南麓の山梨県に含まれる4ヶ町村である。主として、農業を高冷地蔬菜と酪農に重点を置いて扱った。

八ヶ岳南麓はいわゆる中部高冷地に属する地域で、夏の低温と、少雨を特徴としている。地形的には、小さい河川が数条に山麓傾斜面を刻み込み、複雑な起伏を呈している。しかも八ヶ岳火山噴火の際の火山灰に被覆されているため、土壌は強酸性を示し、低品位である。つまり農業に対しての自然条件にはなにより1つとして恵まれていないと言ってよい。しかしながら、この不利な諸条件下にあっても、農業は

営まれてきたのである。その状況というものについて、考察を試みようとしたわけである。

特に驚くべき点は標高1 2 2 0 m付近にまで達している水田であるが、これはこの山麓の各所に湧出する水を利用した結果である。

この水稲作が不利な自然条件をいわばねじ伏せて成立した農業であるとするなら、もう1つ、不利な自然に逆らわずにうまく利用したのが高冷地蔬菜と酪農であるといえよう。言うまでもなく、高冷地蔬菜は夏冷を利用して、市場における供給が減った時をねらって出荷する点にうまみがある。同じく夏冷と、そして他には利用価値のないやせた岩石混じりの急傾斜地を活用して成立したのが、酪農である。そして、以上農業の諸部門と、本地域における開拓地と既存農家との比較の結果、本地域は、大体標高8 5 0 mの線の付近を境に区分されると思われる。この線以下の地帯というのは、平均0.7 5 ha の耕地を持ち、水稲、養蚕と組み合わせて、集約的に、レタス、抑制トマト、キュウリを栽培し、せいぜい1頭か2頭の乳牛を飼育する形態である。

一方、8 5 0 m以上の地帯では、平均して2.4 ha の土地を有し、大型機械を駆使して、白菜・大根を大規模に粗放的に栽培するか又は、土地全体を草地として乳牛を6頭くらい飼育するかの形をとる。

この2つの営農形態の相違はどこから生じたのであろうか。

やはり、それは、経営する土地面積の大小にあるのではないかと考える。何故なら、同じ開拓地でも標高の低い所では割り当てられた土地が少く、当初は他の開拓地と同じ計画のもとに出発したにもかかわらず、現在では既存農家の性格を示し、脱農的傾向にある。また、もう1つ付け加えたい点は、自然条件が農業に与える影響と同時に、農民自身のもつ意欲であると思う。既存農家の地域における急激な抑制トマト、キュウリ、レタスの伸長も、もとはといえば、本地域内の高根町の1農家がためしに栽培してみようと思いたったのがきっかけで拡大していったという。

こうして、農業の制約というものが段々に、内容を変えていくのではないかと思われた。

## 長野県佐久盆地北半部の地理学的考察 —— 盆地床地形を中心として ——

西 川 美 恵 子

本論文では、主として浮石流及び泥流により構成される盆地床地形を、形成過程に留意して述べ、加えて農業土地利用の面から地域性を考察することを意図した。留意点については流下堆積物相互、これらと千曲川、湯川にみられる段丘、南部台地、との関係に注目して調査を行った。

標高6 0 0～8 0 0 mで北部では浅間火山麓斜面に移行する盆地床は、5つの地形区に区分される。本地域南部、砂礫層台地地形区では、湯川及び内山川との間に極めて平坦な台地面が東西に延び、泥流を夾む水平な砂礫、シルトより構成され、少くとも東部では6 0 cm内外の黒褐色土層を載せる。湯川北